

口頭発表場面における敬語の機能

—日本語母語話者と日本語学習者との比較から—

岡部 悦子

【キーワード】 文話 敬語レベル 場面標識 待遇標識 構造標識

1. はじめに

口頭発表場面は、ある表現主体が、多数の聞き手を前に発表や質疑応答を行う場面である。そこでは日常会話よりもスピーチレベル¹が高く、改まった表現が要求される。日本語学習者の口頭発表場面を観察していると、一部が改まりすぎていたり、またその逆にだけすぎたりと、「発表」または「質疑応答」としての「文話」²の表現形態にそぐわず、不自然さを感じることもある。発表や質疑応答は、日本の大学で学ぶ者にとって不可欠な表現能力であり、日本語学習者のみならず日本語母語話者にとっても必要なものである。しかしながら、これに関する研究はまだあまり行われていない³。

本稿では、口頭発表場面を「文話」レベルの敬語使用の面から考察するものである。まず日本語母語話者の発表・質疑応答の分析を通じて、敬語使用とその機能について考える。次に、日本語母語話者と日本語学習者との口頭発表場面を比較し、その差異を分析する。そして最後に、日本語教育への応用を考えることを目的とする。

2. 先行研究

「文話」レベルの敬語使用に着目した主な研究に、生田・井出（1983）、三牧（1993）、岡本（1997・1999）の研究がある⁴。

生田・井出は敬語使用に着目し、日本語の談話⁵を演説や面接試験のように全体を通じて（a）「敬語のレベルが一定のもの」⁶と、日常会話・討論・説明報告のよ

¹ ある「文話」において選択される「表現の待遇度」のことを「スピーチレベル」と規定する。詳細は岡部・蒲谷（印刷中）参照。

² 「文話」とは、く「表現主体」が「表現意図」を叶えるための表現上の一まとまりであり、文章・談話の総称をさす。蒲谷・川口・坂本（1998）pp.29～34を参照。

³ 長友（1998）p.86参照。

⁴ このほか、宇佐美（1995）などがある。

⁵ 先行研究の中ではその出典にならない、「談話」という語を使用する。

⁶ 生田・井出（1983）では非常に親しい者同士の会話のように、「文話」を通じて全く敬

うに敬語が現われたり消えたりして (b) 「敬語のレベルの混用が見られるもの」に分類した。そして (b) 類では、次の3つの要因—①社会的コンテキスト (談話を通して主体となる敬語レベルを決める)、②話者の心的態度 (談話内での相手や話題となっている事柄に対する話者の心的態度を表明するために、敬語レベルをシフトさせる)、③談話の展開 (談話内の流れ、あるいは論理の展開を明確に示すため、敬語のレベルをシフトさせる)—が敬語のレベルを決定すると考えた。

(生田・井出 1983, p.80)

三牧は敬語だけでなく、方言・音便・終助詞・文末文体にまで対象を広げ、それらの談話内の変化を「待遇レベル・シフト」という観点で研究した。そして特に談話展開標識としての機能に注目し、①新しい話題への移行、②重要部分 (結論、結末、意志、事実) の明示・強調、③注釈・補足・独話等の挿入、の際に「待遇レベル・シフト」が行われるとした。

また岡本は、人類言語学や社会言語学の分野で注目されている言語の「指標的 (indexical) 機能⁷⁾」や「フレーム (frame)⁸⁾」という概念を日本語の談話分析に応用し、文末文体のシフトや敬語使用が果たす機能について、場面の性質や参加者同士の相互作用から分析した。

生田・井出及び三牧の研究はテレビ番組の二者間の対談を、岡本は教室談話やマラソンの実況中継を研究対象としているが、いずれもコミュニケーションと言語形式の関わりを考える上で有意義な研究であると思われる。

3. データ

日本語母語話者のデータは、1999年7月の早稲田大学国語学会で行われた2名分の発表・質疑応答の様子を録音文字化したものである。日本語学習者のデータは、早稲田大学日本語研究教育センター1998年度秋学期開講の「口頭表現VI」(中上級レベル)のクラスで行われた研究発表会(1998年12月実施)で行われた6名分の発表・質疑応答を録音文字化したものである。

4. 敬語使用の分類

本稿では、蒲谷・川口・坂本(1998)の「敬語」の分類⁹⁾を参考に、口頭発表場面における敬語レベルを以下の3つに分類し、その機能の分析と、日本語母語話者と日本語学習者の運用の比較を行った。

語が使用されない談話も、敬語のレベルが一定、と考える。

⁷⁾ 言語の命題内容を指示 (referential) する機能の他に、文脈内での意味や人間関係など命題以外の内容を伝える機能。(井出(1993)を参考。)

⁸⁾ 人々が、それぞれの属する言語社会の成員が共有していると考えている、ある言語行動に対する期待。(岡本(1997)を参考。)

⁹⁾ 蒲谷・川口・坂本(1998) pp.91~113 参照。

「0レベル」

文末に「丁寧文体敬語」〈「です」「ます」〉が付加されている文。「～ですが」「～ますけど」など接続助詞で終わる文も含める。

「+レベル」

「丁寧文体敬語」のほか、文中・文末に「概念敬語」〈「尊重語」(「めしあがる」「いただく」など)・「丁重語」(「いたす」など)〉・「丁重文体敬語」(「でございます」)や改まりの高い語が使用されている文。

「-レベル」

文末に「丁寧文体敬語」が付加されていない文。体言止め、「～だけど」など接続助詞で終わる文も含める。

敬語レベルの分類は、文末にくる助動詞・助詞の文法的機能や、語彙・表現の種類によって、さらに細かく分類していくことも可能であろう。しかし今回は、「文話」の主要な展開を把握しやすくするため、主に宇佐美(1995)を参考に大きく「0レベル」「+レベル」「-レベル」の3つに分類した。

5. 日本語母語話者の敬語使用

5-1 日本語母語話者のデータの特徴

日本語母語話者2名(A・B)のデータの特徴を、先の「敬語」の分類を用いて数値の面から整理すると、表1のようになった。

この表から、日本語母語話者A・Bは、発表・質疑応答共に、文末に「です」「ます」を付加した「0レベル」を中心に使用していることがわかる。その中に「+レベル」と「-レベル」が挿入されているが、その使用頻度はAとBで若干差が見られる。Aは質疑応答で「-レベル」が全く使用されていない点に特徴がある。Bは、Aと比較して「+レベル」「-レベル」共に使用頻度が高くなっている。

表1 「日本語母語話者のデータの特徴」

	A		B	
	発表	質疑応答	発表	質疑応答
発話文	139	29	162	35
「+レベル」	13	7	33	11
「0レベル」	115	20	84	17
「-レベル」	7	0	33	7
レベル不明 ¹⁰	4	2	12	0

¹⁰ 音声最後まで聞き取れず、レベルが確定できなかった文。

5-2 「+レベル」・「概念敬語」「丁寧文体敬語」の機能

口頭発表場面では、「0レベル」・「丁寧文体敬語」使用の文が中心となっている中で、「+レベル」・「概念敬語」「丁寧文体敬語」使用はどのような機能をもっているのでしょうか。

まず「+レベル」は、次の例のように自己紹介など表現主体自身のことを述べる時に使用されていることが分かる。

A-4: んと現在 T 大学大学院医学研究科、医学系研究科、認知言語講座、認知言語医学講座というところに所属しております。

A-5: A と申します。 (下線部が該当する部分を示す。以下同様。)

「話す」「報告する」、あるいは次の話題に移るなど、表現主体の言語行動を述べる時も次の例のように「+レベル」が選択されている。

A-19: えー今回お話しするのは複合名詞というアクセントをつける際に規則的にアクセントを付けるということがどのようにき、獲得されているのかという発達過程を追っているいくつかの実験を紹介、報告いたします。

B-73: えー3の2、結合比喩の例にまいります。

また、表現主体が聞き手に指示を与えたり、聞き手の行動や状態に言及する時にも次のように「+レベル」が使われている。

A-7: 座って OHP 使いますので、えーと OHP と手元のレジュメとあわせてご覧ください。

B-60: これは皆さんご自宅でお使いの方もいるかと思いますが、あの傘型の物干しですので、ごく普通の比喩、まあたとえの例だと思います。

以上のように、「概念敬語」を伴った「+レベル」の表現は、表現主体・聞き手といった口頭発表場面の参加者に関する内容について述べる場合に用いられている。これらは表現主体が、自分自身も含めて参加者をどのように待遇しているかという、対人的な配慮を示す目印としての機能を担っていると思われる。このような敬語使用の機能を、本稿では「待遇標識」と呼ぶことにする。

また、「お話しします」「…にまいります」などメタ言語行動表現に「+レベル」が用いられた場合、後続の部分は前の部分とは異なる新たな話題が展開されることが多い。この場合、「+レベル」は「話題の展開部」という「文話」の構造も示す目印になっていると思われる。このような敬語使用の機能を、本稿では「構造標識」と呼ぶことにしたい。「+レベル」は「待遇標識」であると同時に、「構造標識」としての機能も果たしているのではないかと考えられる。

その他、次の例のように口頭発表場面での挨拶やお礼など、定型的に用いられる表現も「+レベル」の表現であることが多い。

A-138: 拙い発表ですがどうもありがとうございました。

A-139: よろしくお願ひします。

これらの表現も、発表・質疑応答の開始部や終結部という「文話」全体の構造

を示す「構造標識」の機能の一部になっていると言えるのではないかと思われる。

5-3 「-レベル」・「敬語不使用」の機能

次に、敬語が使用されていない「-レベル」の場合を考えてみたい。

A-106: まず最初に知っているような国と国旗を示します。

A-107: で、「これは何かな。」と言って文字が読める子であれば「アメリカ」というふう
に言ってきます。

A-108: で、ここでできないという子は「できない」と子供のほうで言ってくる。

A-109: 次にいくつか今のような知っているような国をやった後で知ってそうな知らなそ
うな国名をというのを出示します。

ここでは、A が実験で行った子供の方向づけの方法について述べている。A-108
は、A-107 での子供の反応を補足する説明として付け加えられたものではないか
と考えられる。

B-52: それから同じく『黒い裾』ですが、「裁ち落とされた喪服の裾は真綿をはみ出させ
て死んでいる長虫のようにうねった。」

B-53: これも「ように」を用いたものです。

B-54: えーそれから3番、「ぱっと蝙蝠が飛んだように着物が両袖を浮かせて畳へ
這った。」

B-55: これも「よう」を用いたものです。

上の例では「指標比喩」について述べられている。B は用例を作品から引用し、
その後説明を加えている。B-52・54は「[用例] +です」のように用例部分の後
に「丁寧文体敬語」を使うこともできる。しかしここでは原典通り「丁寧文体敬
語」のない形にすることで説明部分 (B-53・55) との違いを出す効果がある。

以上のような補足や引用・例示は、主となる内容をより補強するための挿入部
分といえる。口頭発表場面における「-レベル」は、挿入部分という「文話」の
構造を示す「構造標識」と捉えることができる。

5-4 「0レベル」・「丁寧文体敬語」の機能

生田・井出 (1983) によれば、基底となる敬語のレベルは「社会的コンテク
スト」によって決まるとされている。それは実際には、表現主体が社会的場面をど
のように認識したかという、表現主体側の判断によって選択されていると思われ
る。従って主体となる敬語のレベルは、表現主体の意識が反映されたものと考え
られる。このような表現主体の場面に対する意識を示す目印を、本稿では「場面
標識」と呼びたいと思う。

今回の場合、発表・質疑応答共に、主体となる敬語のレベルは「0レベル」で
ある。「表現主体」である日本語母語話者 A・B は、「場」「相手」「題材・内容」
「表現形態」等の諸条件を考慮した結果、「文話」全体を丁寧にする働きをもつ「丁

寧文体敬語」を付加した「0レベル」を基底にしたと考えられる。

6. 日本語学習者の敬語使用

6-1 日本語学習者のデータの特徴

日本語学習者6名(S・L・N・X・D・K)のデータを「敬語」の分類を用いて数値の面から整理した結果、発表については表2、質疑応答については表3のようになった。

表2より、発表の基底となる敬語のレベルは、6名の学習者ともに「0レベル」であった。「+レベル」は、Sを除く5名に1例ずつの使用が認められた。「-レベル」の使用頻度は学習者によって異なる。S・Kは多く使用しているが、N・Xの使用例はわずかである。

質疑は、発表より学習者ごとに個人差がある(表3)。「文話」の基底となる敬語のレベルは、S・Xは「0レベル」である。Dは「0レベル」が中心ではあるものの、「-レベル」の使用例が多く、L・Nは「-レベル」の数が「0レベル」の数より上回っている。

表2 日本語学習者のデータの特徴「発表」

	S	L	N	X	D	K
発話文	83	54	49	44	73	95
「+レベル」	0	1	1	2	1	1
「0レベル」	73	48	47	40	64	75
「-レベル」	10	5	1	2	8	19

表3 日本語学習者のデータの特徴「質疑」

	S	L	N	X	D	K
発話文	32	151	60	57	68	20
「+レベル」	1	0	0	1	0	0
「0レベル」	23	62	17	52	43	8
「-レベル」	8	84	41	4	25	12
レベル不明	0	5	2	0	0	0

6-2 日本語学習者の「+レベル」・「概念敬語語」・「丁寧文体敬語」使用

日本語学習者に共通する「+レベル」の使用は学習者自身の言語行動を述べる部分であった。

L-1: わたしは今日は、日本社会の変化と、結婚した女性の社会参加について
お話ししたいと思います。

X-4: わたくしは日本社会におけるマンガの役割について調査いたしましたが、今日は
それについて発表させていただきたいと思います。

これらは日本語母語話者にも見られたように、対人的配慮を示す「待遇標識」であると同時に、新たな話題を導く「構造標識」の機能を果たしていると思われる。

このほかに「+レベル」が使われていたのは、聞き手への指示を表す次の1例のみであったが、これらも「待遇標識」と言えるだろう。

S-111: えっとー、もう1度お願いします。

聞き手への指示には、次の例のように「-レベル」の使用もあった。

S-137: えっとー、ちょっと待って。

また日本語学習者は、日本語母語話者のデータでは「+レベル」であった聞き手の状態や発表・質疑応答の定型表現に「0レベル」や「-レベル」を用いている例があった。

〈聞き手の状態〉

N-8: um 皆さんご祝儀、とはどんなことを覚えていますか?

N-9: んー、忘れませんか?

〈定型表現-発表の終わりの言葉〉

L-54: それで以上。

このように日本語母語話者と日本語学習者の「+レベル」使用を比較してみると、「待遇標識」「構造標識」として使用されていることに共通性がある。しかし日本語学習者の場合は日本語母語話者より使用例が少なく、また使用方法に一貫性が見られない。このことから、日本語学習者には「+レベル」を「待遇標識」「構造標識」として運用することが定着していないのではないと思われる。

6-3 日本語学習者の「-レベル」・「敬語不使用」

日本語母語話者は「-レベル」を補足や引用・例示といった「文話」の構造を示す「構造標識」として使用していたが、日本語学習者の場合にも同様の使用例が見られる。

〈補足〉

L-23: あー、ほかの6人のお母さんは教師としてとか病院で働いています。

L-24: 2人のお母さんは会社員です。

L-25: これは2人だけ、23人の中で。

ここはLが母親の職業について調べたアンケート調査の結果を述べている部分である。L-25は直前のL-24で述べられた情報の補足となっている。

〈引用・例示〉

K-36: そして理由は様々でしたけど、一番多かったのは日本人だからとか、にぶ、自分の生まれた国だから。

K-37: そこ、そういうふうに答えた人は60、60人でした。

K-38: そしてあとは子孫に伝えたいから。

K-39: あとは過去を知ることで現代、自分を知ることができる。

K-36~39 は、K がアンケート調査の質問「日本の昔の文化や伝統を知ることが必要だと思いますか」に対する回答を述べている部分である。回答の引用部分 (K-36,38,39) は「ーレベル」、K の説明 (K-37) は「0 レベルが使用されている。

K-155n③: えっと K さんは日本の伝統というのを思いつきますか?

K-156: まずはわたしは、なんか好きなことというのは、んー、書道とか、んー、囲碁。

K-157: そして、んー、祭り、なんかにぎやかな祭り。

K-158: おみこしをかつい、担いで、うん、にぎやかに祭りをする、という印象があります。

K-155~158 は K の質疑応答部分で、「n③」は質問をした日本語母語話者の発言を表す。「n③」の質問に対して、K が日本の伝統について思い浮かんだことを例としてあげている。このように引用部分を例にあげる場合に限らず、日本語学習者は様々な例の提示に「ーレベル」を用いていた。

このほか日本語学習者には、次の例のように「ーレベル」を話題の展開部を示す「構造標識」として使用する例も多数あった。

D-11: そこでわたしは西洋人と日本人の恋愛と結婚についてをトピックとして選びました。

D-12: まずは、西洋人がもっている日本人のイメージ。

D-13: 1 (いち)、日本人女性のイメージ。

D-14: 西洋では、プッチーニの『マダム・バタフライ』には、女らしくて美しい女、女の人、女性ができました。

D-12 では、まず話題が「西洋人がもっている日本人のイメージ」に大きく話題が展開することを示し、続く D-13 ではその中の小さな話題である「日本女性のイメージ」へ更に展開していくことを示している。このような例は、頻度に差はあるものの日本語学習者に共通して見られた。日本語母語話者場合では、B の発表に 1 例使われていただけであった。

6-4 日本語学習者の「0レベル」・「丁寧文体敬語」使用

「0 レベル」は、日本語母語話者の口頭発表場面全体を通じての基底となるレベルであり、社会的場面の認識を示す「場面標識」としての機能を果たしていた。日本語学習者の場合はどうであろうか。

発表では、表 2 の数値からも、全ての学習者が基底となるレベルとして「0 レベル」を選択しており、これは日本語学習者のスピーチレベルに対する認識を示す「場面標識」と言える。ただし、「場面標識」としては次の例のように日本語母語話者と異なる点もあった。

S-57: でも「はい。」と答えた人の中で、えっとー、愛情がない時だけ友情があると思う

学生は半分です。

S-58: ある人は「15才まで本当の友情がある。」とか、「はい、本当の友情があります。ただ愛情があるのは思わない。」と答えた。

S-59: で、15番の質問、「普通の友達が恋人になったことがありますか。」

S-60: えーとですね、半分以上人は「はい。」と答えた。

S-61: 53%です。

日本語母語話者であれば、S-58・60の部分に「0レベル」を用いるであろう。このように日本語学習者の場合には、所々で「場面標識」が維持できていない部分が見られる。これには言語習得上の様々な問題が関係していると思われる¹¹。この問題については今後更に検討すべき課題と考える。

質疑応答の場合では、表3の数値から、S・X・Dでは「0レベル」が優勢であるが、L・N・Kでは「-レベル」が優勢となっており、学習者の間で差が見られる。特にNの場合、次の例のように「-レベル」の使用が目立つ。

N-58n①: えーと、Nさんの国ではどうですか?

N-59: そういうことない。

N-60: あの、んー、結婚式の時、um、友達と親戚はその花嫁とか、む、む、花婿さんにだけプレゼントをあげています。

N-61: その返しはない。

「n①」はNに質問した日本語母語話者の発話を表す。ここは、Nが「n①」の質問に答えて、Nの国での結婚式の贈り物の習慣を説明している部分である。N-60は「0レベル」であるが、その前後のN-59・61は「-レベル」となっている。答えの中心的な内容の部分に「0レベル」が使用されていることから、基本的に「0レベル」を「場面標識」として使おうとする意識はあると思われる。しかし「0レベル」を維持できず、部分的に不安定になっている。このように「場面標識」を維持できていない点が日本語母語話者との大きな差ではないかと思われる。

7. まとめ

以上、口頭発表場面の敬語使用を「+」・「-」・「0」の3つのレベルに分類し、日本語母語話者と日本語学習者の比較を通じてその機能を考察してきた。その結果をまとめると次のようになる。

¹¹ 第2言語習得論で指摘されている問題としては、プレッシャーの影響・注意の焦点の位置（注意の焦点が情報にあるのか、表現形式にあるのか）・発話を産出するまでの計画時間の影響などの要因を指摘する研究がある。（エリス（1996）を参考。）

A. 敬語使用の機能

口頭発表場面において、敬語使用は「待遇標識」「構造標識」「場面標識」の3つの機能を果たしていた。

- ① 「+レベル」・「概念敬語」「丁重文体敬語」使用には、口頭発表場面の参加者に言及する場合に対人的な配慮を示す「待遇標識」と、話題の展開を示したり、発表・質疑応答の表現形態を規定する「構造標識」としての機能があった。
- ② 「-レベル」・「敬語無使用」には、補足・引用・例示といった挿入部分や、話題の展開を示す「構造標識」としての機能があった。
- ③ 「0レベル」・「丁寧文体敬語」使用には、表現主体の場面に対する認識を示す「場面標識」としての機能があった。

B. 日本語母語話者と日本語学習者の敬語使用の比較

- ① 日本語母語話者は、口頭発表場面全体を通じて、各レベルの機能を一貫して用いることにより、発表・質疑応答という表現形態の特徴がはっきりしていた。
- ② 日本語学習者は、基本的に日本語母語話者と同様の機能を使用が確認できるものの、その使用方法は口頭発表場面全体を通じて一貫しておらず、不安定さがあった。
- ③ 特に日本語母語話者と日本語学習者の相違が見られた点は、
 - ・ 日本語母語話者と比較して、日本語学習者には「+レベル」の使用が少なかった。
 - ・ 話題の展開に、日本語母語話者は「+レベル」を多く用いていたのに対し、日本語学習者は「-レベル」を多く用いていた。
 - ・ 日本語母語話者は、口頭発表場面全体を通じ、「場面標識」として「0レベル」を維持していたのに対し、日本語学習者は「0レベル」を維持できず、部分的に「-レベル」への移行が見られた。特に質疑応答においてその傾向が強かった。

8. おわりに ー日本語教育への応用にむけてー

8-1 「構造標識」を使った口頭発表場面の指導案

日本語の口頭発表場面（発表・質疑応答）には、一定の表現形態がある。そしてその特徴の形成にあたっては、敬語使用が重要な役割を果たしていると思われる。日本語学習者に対して口頭発表場面の指導を行う際にも、本稿で検討した敬語使用の機能を応用できるのではないかとと思われる。その1つの具体的な試案として、今回は「構造標識」を使用した指導例を提案する。

①「構造標識」の導入

指導の初期段階では、まず敬語使用に「構造標識」の機能があることを日本語学習者に認識させることから始める必要があろう。初級からの敬語教育で、敬語使用が場面や人間関係に応じて使用されていることは日本語教科書でも広く取り上げられているが、「文話」の構造との関係を扱ったものはあまりないと思われる。典型的な発表・質疑応答を、文字化した資料を見ながら聞かせ、どこで敬語が使われどこで使われていないかという観察・議論を通じて、学習者自身が敬語使用と発表・質疑応答の構造との関係を発見できるようにするとよい。

②「構造標識」の指導

次の段階では、「構造標識」としての敬語使用の分類とその機能について具体的に指導する。発表・質疑応答の開始部・終結部では「+レベル」の敬語（「概念敬語」・「丁寧文体敬語」）が使用され敬語のレベルが上がること、補足・引用・例示といった挿入部分では「丁寧文体敬語」がとれて敬語のレベルが「0レベル」から「-レベル」へと下がる傾向があること、また新しい話題の導入部でも敬語レベルの変化が起きることを説明する。同時に、具体的にどのような表現が使われるかについても、代表的な例をあげて解説する。構造標識の説明の際に大切なことは、文単位ではなく「文話」全体を提示してその中で機能を確認することであろう。

③口頭発表場面（発表・質疑応答）の練習

口頭発表場面の経験のない日本語学習者に、いきなり日本語母語話者のようなものを期待することは難しいと思われる。始めは短いものから始め、徐々に長い発表・質疑応答が行えるよう発展させるのが良いであろう。また、「文話」全体を通じて「構造標識」の使い方がワンパターンであっても、かえって単調になってしまうことがある。「構造標識」の機能を確認し、その使用に慣れてきたら、発表・質疑応答の「題材・内容」や、学習者自身の個性に応じて適切に「構造標識」が使えるよう、教師は支援していくべきであろう。

今回は1つの試案として「構造標識」を中心とした指導方法について考えてみた。このほかにも、敬語使用の機能には「待遇標識」「場面標識」がある。実際に練習を行う時には、練習を行う口頭発表場面の「場」や「参加者」「題材・内容」などをふまえた上で、どのような「場面標識」「待遇標識」を選択すべきかについても、学習者との間で初めに確認しておくことも大切である。

8-2 結語

従来の敬語を含む待遇表現教育では、表現の正確さに重点が置かれ、「暗記」に流れがちであったように思われる。なぜあることを表現するために敬語の使用・不使用が関わってくるのか、その敬語使用が「文話」全体の構造の中でどのような役割を果たしているのか、という部分にまで発展した議論を日本語学習者と深めることであれば、学習者の理解は一層促進されるのではないだろうか。また、そのような視点は日本語母語話者への口頭表現能力の教育にも応用可能であり、コミュニケーション能力の育成に役立つものだと考える。

【付記】

拙稿は、修士論文『日本語学習者のスピーチレベルシフトとていねいさについて』（早稲田大学大学院文学研究科 2000.3）の一部に、同年4月の早稲田大学国語学会を経て、修正・加筆を施したものである。口頭発表場面のデータの採集にご協力下さった方々に心からお礼申し上げる。

【参考文献】

- 生田少子・井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」
『言語』Vol.12, No.12 大修館書店
- 井出祥子（1993）「世界の女性語・日本の女性語－女性語研究の新展開を求めて－」
『日本語学』5月臨時増刊号 第12巻第6号 明治書院
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用－スピーチレベルシフト生起の条件と機能－」『学苑』622号 昭和女子大学近代文化研究所
- 岡部悦子・蒲谷宏（印刷中）「日本語学習者の口頭発表場面におけるスピーチレベルについて」『講座日本語教育』第36分冊 早稲田大学日本語研究教育センター
- 岡本能里子（1997）「教室談話における文体シフトの指標的機能－丁寧体と普通体の使い分け」『日本語学』Vol.16, No.3 明治書院
- 岡本能里子（1999）「オリンピックマラソン実況放送のアナウンサーの談話管理－謙譲語と名詞止めの機能を通して－」『東京国際大学論叢 国際関係学部編』第5号
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵（1998）『敬語表現』 大修館書店
- 渋谷勝己（1997）「日本語学習者のスタイル切り替え－従属節の丁寧表現をめぐって－」
『無差』第4号 京都外国語大学日本語学科
- 長友和彦（1998）「第二言語としての日本語の習得研究」
『児童心理学の進歩－1998年版－』金子書房
- 三牧陽子（1993）「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」
『大阪教育大学紀要 第I部門』第42巻 第1号
- Ellis, R. (1994) *The Study of Second Language Acquisition* Oxford University Press
ロッド・エリス著 金子朝子訳（1996）『第二言語習得序説』 研究社出版